

入選

テーマ1.. 医療と福祉、わたしの体験
「思うがままに」

神奈川県・相洋高等学校3年 古江快成

私は、8歳の時に「吃音症」と診断されたが、当時の私には、何のことものか理解できなかった。しかし、年齢が上がっていくにつれて、日常生活の中で辛いことが増えてきた。友達や家族と会話をするとき、最初の一言が出ず、数秒ためてやっと声が出る。できるだけ気にしないようにしていたが、ある時、授業中に当てられて、直ぐ答えることができず、クラスメイトに指摘されるという出来事があった。自分のことが嫌になっただし、それ以降、スムーズに話すことだけを考えるようになった。

話すときに声が詰まるのは、緊張やプレッシャーを感じたときによく起きる。それによって、プレゼンテーションやスピーチ、面接などでも思うようにできない。練習しても、うまく喋れず不便に感じている。私は時々「自分が吃音症でなければどんなに楽だっただろうか」と思う。スムーズに話せれば誰にも指摘されず、苦しい思いをせずに生きていられる。しかし、現在の医療では治せる方法はないという。

今、私は大学への進学を希望しているため、吃音症と正面から向き合わないといけない。大学入試で必要となる面接試験は大きな不安の一つであり、面接で詰まらず話すためには努力が必要である。私はまず、吃音症と向き合うようにした。その機会となったのは、国語の作文の授業であった。振り返ると、自分は今まで吃音症について、きちんと向き合ったことはなかったのだ。だが、文字に書き起こしなから、丁寧に向き合うことによって、少しでも自分の自信につながられるようにしたいと思うようになった。

これからの人生、吃音症とどう生きていくか、私は不安だ。社会生活にはコミュニケーションが必要不可欠であり、吃音の私には生きづらい世界である。私は、今後、生きていくためにいろんな経験をすること

になる。その中で、つらいことや苦しいことが多くあるはずだ。けど、私は負けない。思いを文字にする作業は、改めて吃音症と向き合い、吃音症を克服したいという決意につながる。

とは言っても、私は話すときに声が詰まるのが怖い。例えば、「コンビニ エンスストアのレジで「唐揚げください」というとき、私は「……唐揚げく、く、ださい」となってしまふ。そんな時、相手にどう思われているかを考えると、とても怖い。もし後ろに会計を待つ人がいて、私のために時間がかかってしまい、他人に迷惑をかけるとしたら、それは嫌だ。しかし、怖れてばかりでは何も始まらない。だから、まずは自分を知ることにした。少しでも声が詰まらないようにするためにも必要なことだ。己を知ってから、いかに楽に話せるか、練習していきたい。これまで私は、吃音症について誰にも知られないようにしてきたが、これからは、タイミングをみながら、周囲に伝えていこうと思っている。周りの人に伝えることによって、少しでもスムーズに話せるようになるのであれば、「公表する」ことは私にとつて必要なことであると考えているからだ。今までもうまく喋ろうとしてきたが、今思えば、うまく喋ろうとしていたからこそ、逆に緊張して言葉が出なかったのではないか。自然に話すようにすれば、スムーズに話せるようになるのではないか。

吃音症に悩んできた私ではあるが、恥をかいても、小・中・高、すべてしっかり学校へ通った。学校での自己紹介やプレゼンテーションは、それなりに乗り越えてきた。言葉が詰まったとき、いじめられないようにわざと咳をして誤魔化してきたが、咳なんてせず、一旦落ち着いて言い直せばいいと思う。

私が吃音症について、これまで向き合ってきたことは、本当は今まで現実から逃げてきたことなのではないだろうか。バカみたいだ。向き合ったら、少し楽になった。